

The Cambridge Gazette

『ケンブリッジ・ガゼット』
ハーバード大学政治経済情報 栗原報告 No. 31
2005年12月号

ハーバード大学
ケネディ・スクール
シニア・フェロー 栗原 潤

今月号の目次

1. 今年最後のハーバード報告
2. ケンブリッジ情報 (1) 全般的情報
3. ケンブリッジ情報 (2) 研究活動紹介
4. ワシントン情報 国際関係

1. *The Cambridge Gazette* 第31号: 今年最後のハーバード報告

11月下旬を迎えて、ニューイングランドに相応しい厳しい寒さが訪れてきた。そして23日には、小雪が舞い散る天気となった。このような季節になると、暖かい鍋料理が思い浮かんできて日本が一層恋しくなる。さて、小誌 *Gazette* も今月号がケンブリッジ情報を読者に届ける今年最後の報告となり、時の経過の速さに改めて驚いている。年末まであと1ヵ月程残してはいるものの、この1年を振り返ってみれば、当然とは言え、自らの能力の限界を感じずにはいられない。しかしながら、すべてを自らの非力のせいにして、簡単に諦めるような卑怯な真似だけはしたくない。不義理をしない程度に忘年会の出席回数を制限し、残された課題を少しでもこなして新年を迎えたい。さて、いつもの通り、(1)筆者が経験した興味深い出来事、(2)筆者の興味を惹いた研究活動、(3)ワシントン・ボストン情報としての国際関係、以上3点を報告する。

2. ケンブリッジ情報 (1) 全般的情報

ケンブリッジからの全般的情報として、今回、(a)感謝祭とグローバリゼーション、(b)ケンブリッジでの楽しい出会い、と題し筆者が感じたことを報告する。

(a) 感謝祭とグローバリゼーション

米国で11月と言えば感謝祭である。一見逆説的であるが、この国特有の祭を通じ、筆者には時を超えたグローバリゼーションを感じている。感謝祭当日の24日、同僚で開発経済学の専門家であるオーストラリア生まれのマルコム・マクファーソン氏に招かれ、筆者は同氏のご家族や知人と共に七面鳥と様々な世間話を楽しんだ。美しいお嬢さん達が奏でるバッハやモーツァルトの柔らかな音色に包まれながらワインで体を暖めた筆者は、束の間ながら、日頃は緊張気味で目新しい情報を追い求めるビジネス動向や東アジア情勢のことを忘れていた。その1週間前の17日は、ケープコッドに在るエレーン・ケイマーク本校講師の邸宅に友人達17人で訪れた。感謝祭は初めてという中国人フェローやアルバニア共和国の経済・民営化大臣や財務大臣を経験したアルベン・マライ氏のご家族と共に、ワイン・グラスを片手に遠浅の海岸に出て、ニューイングランドの冷たそうな波を眺めていた。また、米国の知人達が語る「米国に辿り付くまでの話」にも耳を傾けた。フェロー・プログラムのディレクターであるミランダ・ダニロフ=マンクーシ女史は、彼女の祖父がロシア帝国の将軍だったこと、彼が西欧滞在中の1917年にロシア革命が勃発し、彼はそのまま流浪の身となったこと、後に彼女の父親となるその将軍の息子が英国のオックスフォード大学で彼女の母親となる英国人女性と出会ったこと、そして後に二人は結婚して米国に移り住んだこと等、ダニロフ=マンクーシ家の辿った数奇な運命を我々に語ってくれた。

その日、中国国家外貨管理局(SAFE)副局長(国家外汇管理局副局长)の李東栄(李东荣)氏

も、奥様を連れてケープコッドを訪れた。小誌前号でも触れたが、達筆な李氏は漢詩を愛する教養人である。岸辺で遠くの海を眺めつつ、筆者は李氏に対して陰暦 10 月 12 日に当たる今年の 11 月 13 日は芭蕉忌であったこと、芭蕉の『奥の細道』は李白の「春夜宴桃李園序」の引用で始まっていること、日本海の名勝、象潟(きさがた)の美しさを表現する際、芭蕉は蘇東坡の「西湖」を引用していること等を語った。そして、昔と同様に、現在も日中両国は互いに長所を取り入れ短所を補うべき(中国語で、取长补短/取長補短)と二人で語り、往時のグローバリゼーションに想いを馳せていた。李氏は文人であると同時に「名シェフ」であることを自慢する。これまでは、同氏が筆者を自宅に招待しようとする時に限って、筆者に先約が有り、折角の機会を逃している。もしも懲りずに李氏が今度招待を申し出てくれた時には、蘇東坡の名を抱く杭州に縁の深い「東坡肉(トンポーロー)」を厚かましくもリクエストしてみたいと考えている。

(b) ケンブリッジでの楽しい出会い

ケンブリッジでの晩秋は、人々、音楽、書物との予期せぬ新たな出会いを楽しんでいた。10 月 15 日、外交政策研究所(IFPA)のジェイムズ・ショフ氏が自宅で開いたパーティに招いてくれた。初めてお目にかかった韓国人のご夫妻は、筆者が冷麺(ネンミョン/냉면)等で有名な韓国料理店(「ウー・ライ・オウク/Woo Lac Oak/Uraeok/又来屋/우래옥」)や韓国風シャブシャブのシンソルロ(神仙炉/신선로)を知っていると聞いて彼等は大いに驚いた。そして、宮廷料理のクジョルパン(九節板/고절판)や石釜混ぜご飯であるトルソッ・ビビンパブ(돌솥비빔밥)の話題で互いに打ち解けあうことができた上に、奇しくもお互い同じマンシヨンの住民であることが判明して喜んでいる。また、彼等から、日本の韓国ブーム(「韓流(한류)」)で有名な「ヨン様(은사마)」ことペ・ヨンジュン(裴勇俊/배용준)や「ビョン様

(은사마)」ことイ・ビョンホン(李炳憲/이병헌)等の韓国俳優が自国では日本ほど人気が無いことも教えて頂いた。韓国ドラマ『冬のソナタ(겨울연가)』や『宮廷女官チャングムの誓い(大長今/대장금)』に関して、筆者自身が感心が無いだけに何とも判断がつかない。ただ、小誌昨年 12 月号でも述べたが、動機・理由が何であれ、日本に一番近い隣国に関心を持つことは自然でありまた重要である。筆者はご夫妻に向い、「日本の女性の好みを云々するよりも、日本の男性の魅力に問題があるからでしょう」と微笑み、筆者は自らの才能に沿った形で、韓国料理を通じて同国の文化と歴史を学んでゆこうと考えている。

11 月 4 日、本学のペイン・ホールで、イン・カルテット(英弦楽四重奏団)による無料の音楽会が開催された。若き日のベートーヴェンが 1800 年に作曲したとされる『弦楽四重奏曲第 6 番変ロ長調(Streichquartett Nr. 6 B-Dur)』も良かったが、初めて聴くアルゼンチンの作曲家アルベルト・ヒナステラの『弦楽四重奏曲第 1 番(Cuarteto de Cuerdas nro.1)』は感動的であった。本学に現在所属する中華系米国人の兄弟で構成された四重奏団の演奏を聴きながら、トロイ(Τροία)やミケナイ(Μικήνες)の遺跡発掘で有名なハインリッヒ・シュリーマンが語った中国人の音感に対する批判に関して思い出し笑いをしていた。10 月初旬に私用で一時帰国した際、講談社学術文庫『シュリーマン旅行記 清国・日本』を購入した。その中で、著者は中国人が「ハーモニーとかメロディーとかどんなものかまったく理解していない(Le peuple chinois n'a pas la moindre conception ni d'harmonie ni de mélodie.)」と語っている。彼の批判に答えてか、イン・カルテットの音色は、国籍にかかわらず才能を備えた「志」の高い人間は機会さえ与えられれば誰でもその才能を発揮することができることを証明しているように筆者には思えた。さて、残念ながら面識は無いが、このシュリーマンの著作を邦訳された石井和子女史が、MIT に留学されてここケンブリッジとも縁が

深い石井宏治石井鐵工所社長のお母様であることを知った。そして、この本に惹かれた筆者は、本学図書館で原書を見つけ、一気に読了した。また、その本が邦訳本の原書(1869年版)と異なり、1867年版であること、また、著者の名も仏語に近い表記で、ハインリッヒ(Heinrich)ではなく、アンリ(Henry)となっていることを発見した。出版元の住所は、パリのオペラ座の近く、イタリアン大通り(Boulevard des Italiens)沿いであり、今度のパリ訪問の際、辺りを歩いてみようと考えている。1867年のパリと言えば、第2回万国博覧会が開催され、今でもフランス料理に名を残す名シェフ、アドルフ・デュグレレが、レストラン「カフェ・アングレ」で、ロシア皇帝アレクサンドル2世やプロシア国王ヴィルヘルム1世等に対して出した料理はグルメ・ファンの記憶の中に今も生きている。そして、日本からは江戸幕府に加えて、薩摩、佐賀の両藩も万国博に参加している。幕末期における日本の「サムライ」達は、欧州文明との様々な邂逅のなかで、どんな驚きと喜びを感じたであろうか。そのような勝手な想像に耽りつつ、ケンブリッジでの予期せぬ出会いを楽しんでいる。

3. ケンブリッジ情報 (2) 最近における研究活動の紹介

10月から11月にかけては、2度の一時帰国時を挟んで、本学での幾つかの会合、自らの研究計画発表、論文の作成、そして、日米両国での講演や発表を経験した。

ケンブリッジ情報の第一は、米国を代表する企業の一つ、コカコーラ社の経営を長年経験した人との対話である。10月下旬、コカコーラの前CEOであるダグ・ダフト氏が、我がセンター・フォー・ビジネス・アンド・ガバメント(CBG)を訪れた。10月18日昼食時、CBGシニア・フェローと共に、また、同日夕刻にはジョン・ラギー教授、ハイネケンのアンソニー・ルイス元会長と共に、更には、21

日朝、アジア・フェローと共に、ダフト氏と語り合った。同氏は、グローバル時代のブランド戦略や企業の社会的責任(CSR)、コカコーラ社の地域戦略や投資行動等について我々に語ってくれた。ダフト氏は、1988~91年、東京に駐在した経験があり、筆者が「当時、私も東京アメリカン・クラブを訪れ、在日米商工会議所(ACCJ)の会合によく参加したものです」と自己紹介で語ったところ、ダフト氏は、80年代後半、日米貿易摩擦が厳しい時代に、コカコーラ社とは好対照を成す形でバドワイザー社が被ったマイナスの影響を語ってくれた。また、最近のインドや中国でのコカコーラ社の活動を紹介しながら、我々にアジアにおける現地化の難しさを語ってくれた。そして、近年、競争条件が一段と激化した中国市場では、娃哈哈(Wahaha)を筆頭とする現地企業との争いが熾烈であると教えて頂いた。筆者が、「でも、娃哈哈はフランスのダノンの資本が背景にあるでしょ?」と聞くと、コカコーラ社の元中国市場担当の人が「その通り!」と答えたので、筆者自身、自動車をはじめとして中国市場を巡る米仏資本間の国際競争の熾烈さを改めて認識した次第である。ダフト氏からは、「ファンタ」は第2次世界大戦当時、コカコーラの原液が枯渇したドイツの業者が製造したものを、戦後、コカコーラ社が引き継いで世界に広めたことや、缶コーヒーである「ジョージア」は日本の現地企業の提案から生まれたこと等、興味深い史実や経営上の課題等について教えて頂いた。

第二のケンブリッジ情報は、重苦しい歴史が絡んだ欧州の話である。10月17日、ボストン大学人間科学研究所(IHS)で開催された会合「今日、ドイツにおけるユダヤ人であること(Being Jewish in Germany Today)」に出席した。ホロコーストを生き抜いたドイツ系ユダヤ人社会の代表的作家の一人、エステル・ディシュライト女史とジョージタウン大学で欧州のユダヤ文化を研究するジェフリー・ペック教授を迎え、ブランダイス大学のザビーネ・フォン・メーリンク教授の司会の下で、

重苦しく複雑な状況にある現在の在独ユダヤ人社会について討論が行われた。10万とも20万ともいわれる在独ユダヤ人であるがその階層構成は筆者の想像以上に複雑である。彼等は、①ナチス・ドイツ時代に殆ど虐殺されたために極めて少数派となったが、厳格な規律と自らの正統性を自負するドイツ系ユダヤ人、②迫害を避けて新たにドイツに移り住んできたロシア系ユダヤ人、そして、③その他の地域から経済的理由でドイツに移り住んだルーマニア系やポーランド系のユダヤ人等に分かれるという。ディシュライト女史によると、少数派のドイツ系ユダヤ人は今尚ナチス・ドイツ時代の記憶に悩まされている。例えば、日常生活においてドイツ人と語り合う時も、ドイツ人の親の世代が親衛隊(Schutzstaffel (SS))であるかも知れぬという恐怖感に苛まれているという。ペック教授は、冒頭、聴衆に向って、米国に住むユダヤ人が想像する「ベーグルを手にするユダヤ人」は、現在一部の地域でしかも一時的に流行していることを除けば、ドイツには殆ど居ないと語った。そして、独系ユダヤ人と米系ユダヤ人との違いを力説し、お互いの交流の重要性を訴えた。

この会合で、近年のドイツ政府による宥和政策で、2002年にはドイツに移住するユダヤ人の数がイスラエルに移り住むユダヤ人の数を超過したということや、2004年12月まで実施されたドイツのユダヤ人移住優遇制度が反差別的な色彩が強まり、トルコ人をはじめ他の移民達との対立さえ生まれているという事態を初めて耳にした。極東に位置する日本に居ると往々にして、ドイツの戦後処理がすべて良好で、日本の戦後処理がすべて稚拙であったかの如き単純な解釈をしがちである。こうした点に対する注意を、この会合は筆者に喚起してくれた。ベルリンに在るユダヤ人を追悼する記念施設(das Denkmal für die ermordeten Juden Europas)に代表されるように、ドイツの戦後処理に対する努力を評価する筆者の友人は、ユダヤ人を含めて確かに多い。しかし、興奮を抑えるかのようにつむき加

減で語るディシュライト女史の姿、また、小誌3月号でも簡単に触れたドレスデン空襲60周年記念日におけるネオナチのデモ行進に関する討論等に接した時、東アジア同様、欧州にも今尚漂う重苦しい「歴史の重み」を感じた次第である。会合では、女帝エカテリーナの時代、ロシアに迎え入れられたものの、時を経るに従い過酷な運命を辿ったヴォルガ系ドイツ人(Wolgadeutsche/Volga Germans)にも触れられ、東欧における「傷跡」の凄さを垣間見たようで気持ちが相当鬱屈してしまった。

その後、10月末に実施されたポーランドの選挙動向や、戦後の領土縮小に伴うドイツ系難民が集う団体(Bund der Vertriebenen (BdV)/Federation of Expellees)の活動を知るに従い、ドイツは陸続きであるが故に日本以上に話が相当複雑であることを理解した。同時に、ドイツが誇る大哲学者、イマヌエル・カントや日本にも縁が有るブルーノ・タウトを生んだケーニヒスブルクはカーニングラードと名を変えてロシアの飛び地となり、嘗ての東プロシアの中心都市としての姿は薄れて現在に至るといふ痛ましい話を聞いた。話の最後に脱線して恐縮だが、IHSの会合後、ワインを片手に歓談する場が設けられるが、今回はとても楽しい気分になれなかった。そして友人とさっと会場を逃げ出し、近くに在ってタイ料理では「ボストン No. 1」と噂されるレストランに飛び込んだ。そこでは、言葉では表現できないぐらいの美味しいデザートを楽しみ、健やかな気分転換をした次第である。

ケンブリッジ情報の第三は、法律関連学術団体(留美中国法律学会/US China Law Society)主催による会合である。11月最初の週末(5~6日)、本学ロー・スクール(HLS)で、「岐路に立つ中国(China at a Crossroads)」と題した会合が開催された。HLSで中国の法律問題に関して中心的役割を果たしているウィリアム・アルフォード教授の開会の辞に続き、CBGフェローの劉向民(刘向民)氏が総合司会を務め、①中国の社会的側面を討議した第1

セッションでは、本学政治学部のエリザベス・ペリー教授の司会の下、(a)中国社会科学院(CASS)農村発展研究所(农村发展研究所)の于建嵘氏が、資料「転換期の中国における社会的衝突(转型期中国的社会冲突)」に基づき、農民や労働者に関わる争議の実態や原因等を語り、(b)本学公衆衛生研究大学院(HSPH)のウィリアム・シャオ教授が医療保険制度に関する問題点を指摘し、(c)イェール大学のヘレン・シュウ教授が社会学の立場から貧富の格差の実態を解説した。②経済的側面に着目した第2セッションでは、冒頭、急に本会合に出席不能となった CASS 経済研究所(经济研究所)の李実(李实)教授が用意した資料を総合司会役の劉氏が説明した。次いで、マサチューセッツ工科大学(MIT)の黄亜生(黄亚生)教授やイェール大学の陳志武(陈志武)教授等が、インドと中国の経済発展の違い、また農村部と都市部の格差解消について各々の意見を述べた。第1日目の最後は、我が CBG フェローの仲間である清華(清华)大学の蔡継明(蔡继明)教授が、都市化に伴う農地の収用問題に関する政策提案を行った。脱線で恐縮だが11月2日に日本から戻った直後で、その上、3日朝には CBG で自らの研究発表を行ったために、日本で行動を共にしたアンソニー・セイチ教授と同様、筆者は当初、日曜日開催の第2日目を欠席する予定であった。が、基調講演の講師が小誌前号でも触れた科学技術部(MOST)副部長(科学技术部副部长)の尚勇氏であると知って、眠気を押して彼の講演を聞いた次第である。この会合で、筆者が印象に残った点は、①中国の問題点を指摘する際の干教授の率直さ、②都会(北京市)出身の黄教授と地方(湖南省)出身の陳教授がジョークを交えながら知的会話を楽しむエレガントさ、そして、③第1日目最後の発表者という特権をフルに活用して、制限時間を物ともしないで発表した蔡教授の堂々とした態度であった。

11月10日、中国で初めての外人頭取として、深圳発展銀行(深圳发展银行/Shenzhen Development Bank (SDB))の経営を取り仕切る

ジェフリー・ウィリアムズ氏が、本校に懐かしい顔を出した。そして同氏は、セイチ教授を含む我々の前で、彼の目を通した中国事情を聞かせてくれた。同氏は前日にペンシルヴァニア大学の研究所(Global Interdependence Center (GIC))で、偉大な計量経済学者のローレンス・クライン教授も出席した会合(China in an Interdependent Global Economy: GIC 24th Annual Monetary and Trade Conference)で講演した資料「外からの僧侶: 外資と中国銀行制度(A Monk from Outside: Foreign Capital and the Chinese Banking System)」を基に、そして、我々だけに内情を詳しく追加してくれて、現場感覚に満ちた話をしてくれた。

冒頭、ウィリアムズ氏は、SDBにおける不良債権処理と内部機構改革に関する具体的事例を紹介した。同氏は、「問題の所在は中国人自身分かっている。が、彼等だけでは果敢に改革に打って出ることができない。そこで我々『外資』が導入されたのだ」と語り、中国の諺「外来(的)和尚会念经(その意は、外から来た人は、(内部の人に比べて様々な点で)思い切って正論を語れる)」を引用した。そして、同氏が書いた内部改革の指示書が、そのままそっくり中国政府を通じて他の銀行に伝達された話をしてくれた。同時に、中国銀行業監督管理委員会(中国银行业监督管理委员会(CBRC))が同氏に対して抱く警戒感も語ってくれた。そして、今度は別の中国の諺「叶公好龙(その意は、歓迎すると口先では言っておきながら、行動自体は正反対で、実際は恐れ、ひいては拒絶する)」を引用してくれた。中国の金融制度改革に関して結論的に言えば、同氏は楽観的である。また、中国史に造詣の深い同氏は、「中国の金融制度に関して歴史が無いと言う人がいるがそれは大間違いである。中国の歴史を知る者ならば、中国には唐代に手形制度(飞钱/飛銭)が存在していたことを知っているであろう」と語ったが、それを聞いて筆者は自身の浅薄な知識に恥じ入った次第である。ただ、そうは言っても、中国の金融制度に関して不安感は拭いきれない。当

然のことながらウィリアムズ氏自身も、10月29日付『エコノミスト』誌の記事(A great big banking gamble – China’s banking industry)を知っている。参考までに、11月11日、ラジオ放送(National Public Radio (NPR))の番組に、国際経済研究所(IIE)のニコラス・ラーディ氏が出演し、金融部門を同国の「アキレス腱(the Achilles’ heel)」と指摘している。また、ウィリアムズ氏が引用した諺を逆手にとったかの様に、中国証券市場に対する外資導入の有効性を疑問視する記事「外から来た人は正論を語れるか?(外来和尚会念经?)」(11月18日付《中国证券报》)を発見し、CBG フェローで中国証券監督管理委員会(中国证券监督管理委员会(CSRC))の王雪松女史と共に、情勢把握の難しさについて語り合っている。ウィリアムズ氏が深圳に戻る前日、筆者は、日本にも進出している GE の消費者金融部門(GE Consumer Finance (GECF))と SDB が、10月21日に発表した協力関係(Strategic Cooperation Agreement)等聞きつつ、「いずれにせよ、頭取の重責を終えたら、立派な回顧録が書けるね」と言った。同氏はそれに答えて「本当に書くことが沢山有るよ」と微笑み返したのが印象的であった。

次に、セイチ教授等と共に参加した日米中三国を巡る大阪での三極会議を簡単に紹介する。10月31日、「アジア・太平洋地域における経済・安全保障問題、地域の安定」という会議が開催された。これは、小誌昨年12月号で触れた上海三極会議に続く形の第2回目の会合である。今年の会場は上海の花園飯店であったが、今年の会場は大阪のホテル・ニューオータニで、そこに、関西経済同友会と日本経済政策学会、復旦(復旦)大学、そして本学の人々が集った。会合は、関西同友会の萩尾千里常任理事・事務局長による総合司会の下、朝9時半に関西経済同友会代表幹事の松下正幸松下電器産業副会長の歓迎の辞で始まり、最後には、同じく代表幹事の森下俊三西日本電信電話社長による総括という形で、夕刻6時まで終日開催された。内容は、①第1

セッション「アジア・太平洋地域の経済・政治環境」として、(a)東洋大学の松原聡教授が「民営化と経済活性化」を、(b)関西同友会常任理事の田村雄二住友商事顧問が「東アジア経済連携の形成、その課題と日本の役割」を、(c)本校のセイチ教授が「中国における政治状況」を、(d)復旦大学の李維森(李維森)教授が、「中国は民主主義を確立するか」を発表した。昼食後は、②第2セッション「アジア・太平洋地域の安全保障体制」として、(a)関西経済同友会常任理事の岡野幸義ダイキン工業社長兼 COO が「同地域の平和と安定に向けた日米中の役割」を、(b)本学国際問題研究所(CFIA)フェローのチャールズ・フーパー米国防軍大佐が「同地域における軍事協力体制——インド洋津波災害救援活動」を、(c)復旦大学の華民(華民)世界経済研究所長(世界经济研究所所长)が「中国と日本: 協調か競争か?」を発表した。そして、③第3セッション「アジア・太平洋地域の安定のために、それぞれが果たす役割」として、(a)CBG のジュリアン・チャン氏が「米中日三国関係」を、(b)復旦大学の陳建安(陳建安)教授が「東アジアの統合と中日の産業協力」を、そして最後に、(c)筆者が「国際的ネットワーク、人的交流が地域安定に与える影響」を発表した。

チャン氏と筆者は7月にディヴィッド・エルウッド校長と訪れて以来の大阪訪問となった。今回の訪問でも、会議前日の楽しい会食に始まり、会議当日の晩餐会まで、頭脳だけではなく、目にも胃袋にも素晴らしい刺激を受けた機会に恵まれた。今年2回目となった三極会議を成功させたという満足感と安堵感からか、晩餐会は本当に和やかで、冒頭、松下代表幹事が来年の第3回会議開催を提案され、皆から拍手が湧き起こった。また、会食時、筆者の正面に着席された関西経済同友会常任幹事の大林剛郎大林組会長とは、最近の日中関係について話し合うと共に、夜間照明に映える大阪城の天守閣が大林組によって建築されたことを教えて頂いた。さて、この大阪三極会議で行われた発表及び討論はそれぞれ

れ大変興味深かったが、紙面の制約上、残念ながら省略せざるを得ない。しかし、もし敢えて一つだけ取り上げるとするならば、チャン氏が我々に語った本校が絡んだエピソードであろう。今年8月初旬、カムチャッカ半島沖水深190mの海底で、露国海軍の小型潜水艇(AC-28/AS-28)が航行不能となり、日米英3カ国の海軍が救難出動したのを記憶している読者も多いであろう。また、この報道に接して、丁度5年前の2000年8月、バレンツ海の水深90mの海底で遭難した露国海軍原潜「クルスク(Kypck/Kursk)」の中に閉じ込められた118名全員が死亡するという悲劇を想起した読者もいるであろう。が、この小型潜水艇救出劇に、本校が実施する或る研究プログラム(U.S.-Russia Security Program)が絡んでいたことを知る人は少ないのではなからうか。カムチャッカ半島沖で潜水艇救出作業にっていたヴラディミール・アヴドシン露国海軍大將は、本校の同プログラムに昨年度参加した人であった。そして、一刻を争う緊急事態に際して、同大將は遠く離れたモスクワの米国大使館の駐在軍官に電話をかけた。モスクワ駐在軍官のベン・ワッケンドルフ米国海軍少將は、同大將と共に本校の同プログラムに参加した米国海軍の将官であった。軍規を犯して電話をかけた同大將は、「海軍軍人として、また、友人として君に電話をかけている。我々は助けを求めている」と語った。ワッケンドルフ少將は直ちに上官に報告すると同時に、アヴドシン大將に対しては、同様の連絡を英国海軍にするよう勧めた。その結果、マスコミで広く報道された通り、潜水艇の乗組員7名は、76時間後に救出された。しかも、残りの酸素はあと12時間しか持たないというギリギリの状況で…。チャン氏が披露したエピソードを聞いて感動し、ケンブリッジに戻った後、筆者は同プログラムの内容をもう少し詳しく調べてみた。毎年、米露両国の高官を迎え入れ、ブリュッセルのNATO軍司令部やロンドンの英国軍司令部でも研修を行う同プログラムは、今年で15年目を迎えている。そして、同プログラムの運営担当者は、次の

ようなことを述べている。「このAS-28救出作業こそ、同プログラムの重要性を例証したものである。そこでは参加者同志が単に学び合うだけでなく、互いに『ハーバード仲間(Harvard buddy)』として、非公式の友人関係が育まれるのである」と。筆者もまったく同感で、同プログラムの担当者が語った通り、我々CBGも、“Harvard buddies”の精神が宿る様々な非公式の関係の重要性を感じている。

この大阪会議で、本校出身で中国語も堪能なフーパー大佐と初めて出会ったことを喜んでいる。たとえ同じ本学の間人同士であっても、それぞれ自らの研究活動が忙しいが故に、言葉を交わし、また更に打ち解けあう機会は極めて限られている。同大佐とは、東アジアの安全保障に関する彼自身の情勢判断に加えて、米国における軍民間の情報・意見交換体制、更には教師である奥様の活動を通じて彼が感じた米国の教育問題等について語り合った。筆者は、安全保障に関する研究者や政治家である米国の知人から、日本における軍民間の交流の希薄さを嫌と言う程聞かされる。すなわち、「軍民間の交流が希薄だと、相手が何を考えているか分からなくなり、互いに疑心暗鬼に陥りやすく、正確な判断が難しくなる」という旨の警告を聞く。その意味で、国防という重要な領域に関して真剣に討議する姿勢を継続的に抱き、また、そして筆者にもフーパー大佐との出会いをもたらしてくれた三極大阪会議を積極的に推進されている関西経済同友会に改めて敬意と謝意を表したい。また、島田忠文氏をはじめとする事務局の方々の心遣いは素晴らしく、ホテルに宿泊した者には皆、大阪城の夜景を楽しめる部屋を用意して頂き感激している。会議では、上海でお目にかかった有能な同時通訳の方々と再会することができた。今回、筆者は発表に際して、関西経済同友会フェローが本校で如何なる形で活動に参画しているかをより具体的に示したいという理由から英語でスピーチを行った。このため、筆者の醜い英語を参加者全員の方々に押し付けた形になったが、発表後、日

中双方の同時通訳の方々には筆者に声をかけて下さり、彼女達の優しさに改めて感謝している。また、会議の途中、阪神タイガースのリーグ優勝ですっかりテレビでも有名人になられたと聞く國定浩一大阪学院大学教授ともお話をすることができた。小誌 8 月号でも紹介したが、7 月にエルウッド校長と大阪を訪れた際、昼食時に、「もしタイガースが日本リーグで優勝し、レッドソックスが大リーグで優勝すれば、太平洋をまたいだ試合を考えねば」と関西経済同友会の皆様と談笑していた。今回、國定教授に「日米共に残念な結果でしたね」と話かけると、「世の中、そんなに甘くはありません」と肩を落としながら國定教授が応えられた。國定教授の後ろ姿が寂しさで包まれていたが故に、「今度こそは」と思っていた背広の裏地にある華やかなタイガースの模様を見せて頂くことを計らずも忘れてしまい、筆者は二重の意味で残念に思った次第である。

大阪会議の翌日、セイチ教授とチャン氏と共に東京に向かった。東京では、日本銀行の堀井昭成国際局長、瀬口清之氏、岡寄久実子女史等と面談し、中国の将来展望について意見交換を行った。また、その夜、既に 10 時近くではあったがチャン氏と二人で「六本木ヒルズクラブ」に向かい、本校同窓会を代表する人の一人、牧野容子女史と東京の美しい夜景を楽しみながら、シャンパン「ヴーヴ・クリコ」で乾杯をし、本校の一層の活躍を祈った次第である。今回の一時帰国では、筆者単独で様々な方々にもお目にかかった。時は前後するが、10 月 25 日、イメージプラン社長で、物心両面で筆者を支えて下さる田口佳史先生と、二人で始める研究活動の拠点「東西の知の融合研究所」について意見交換をさせて頂いた。いよいよ筆者が長年抱いていた日米中三極関係に関する研究の本格的始動である。また、10 月 28 日夜、九州電力エグゼクティブ・アドバイザー等多彩な肩書きをお持ちの鶴木有子女史から、神楽坂に在るフレンチ・レストランで開かれたインシアード (INSEAD) の会合にご招待頂いた。同会合にお

けるキーノート・スピーカーは東芝顧問の西室泰三東京証券取引所会長であった。会場では、西室会長をはじめ、世界で活躍される方々とお目にかかる機会に恵まれた。そのなかには、「ヴーヴ・クリコ」の日本法人社長をされている方や、筆者自身はもう 4 年近く会っていないが本校ビジネス・スクール(HBS)出身でアジアのベンチャー・キャピタリスト、ジョン・ポール・ホー氏を良く知っている方等、言葉を少し交わしただけで驚くような経歴や才能を持った方々との出会いを楽しませて頂いた。この会合をオーガナイズされた鶴木女史は、田口先生のご紹介で知り合った方で、人とのご縁の有り難さを改めて感じている。

次に報告するのは欧州・中東間の関係である。11 月 7 日夕刻、本学欧州問題研究所(CES)は、フランコ・フラッティーニ欧州連合(EU)副委員長を迎えて、イランの核開発問題を中心に討論会を持った。周知の通り、このイランの核開発問題は、ウィーン国際原子力機関(IAEA)でも討議されている難しい問題である。法律の専門家でイタリア外相を経験した同副委員長の発表が終った後の質疑応答時間は、情報量が豊富で、また恐ろしくも感じられた一時であった。20 人余りの参加者からは、フランスで爆発したイスラム系若年層の不満が欧州全体に広がる危険性や今後の対イラン交渉の方針等、不勉強の筆者には殆どついていけない内容であった。その時、隣に座った女性が、「副委員長の説明はまったく的外れで、中東情勢を完全に誤解しています！」という言葉で始まる長い発言には驚かされた。厳しい語調、凄惨な剣幕は参加者全体を怯えさせ、彼女を挟んで筆者と反対側に座っている人が「貴方は何処からの人？」という質問に対して彼女は「イランよ！」と答えた。副委員長の返答に満足しない彼女は、何度も挙手して発言を試みる。そうしたなか、彼女の隣に座っていた女性をはじめ何人かは物騒な雰囲気、空いたばかりのイラン人女性の隣の席に私服の警護官とおぼしき人がサッと着く。部

屋を逃げ出す人々を目で追いながら、「ここで慌てふためいては日本男児の名がすたる」と思ったものの、その後の質疑応答に対して集中力が働かなかった。その後、何人かの人々が話題を変えて質問した結果、2 時間余りの討論会は無事終了した。会場を出た筆者は、警察の車をはじめ警護の車両で CES が包囲されていたことに驚いた。その光景を見て、中東問題の厳しさを改めて感じた。

大阪に到着した 10 月 30 日、ホテルで新聞を広げて見ていると、本校出身で関西学院大学の村田俊一教授の写真が目飛び込んできた。また、ケンブリッジに舞い戻った 11 月初旬、多くの友人から、元 CBG フェローで慶應義塾大学産業研究所の野村浩二先生のご著書『資本の測定』が日経・経済図書文化賞を受賞して新聞に大きく報道されている旨の電子メールを受取った。尊敬すべき“Harvard buddies”が活躍することは筆者にとっても誠に嬉しい限りである。以前、小誌でも簡単に紹介したが、野村先生が今年の 2 月、筆者に向かって「*Gazette* をまとめて本にしませんか」と優しい声をかけて下さった結果、11 月中旬、遂にその本が出版された。野村先生と筆者の著作を共に担当された慶應義塾大学出版会の木内鉄也氏と二人、帝国ホテルのレストランでシャンパンを片手に静かに微笑み、本の完成を喜び合った。野村先生の多忙さ故に、残念ながら三人での乾杯は来年までおあづけになるが、先生の素晴らしい研究活動のお蔭で、同出版会のウェブサイト最上段に我々二人の本が並んで掲載された。「日本語だけなんです」と断わりながらも、本学の友人達にそのウェブサイトの存在を伝えたところ、ディール・ジョルゲンソン教授やエズラ・ヴォーゲル教授等の先生方からお祝いのメールを頂戴し、恐縮してしまった。また、本校に筆者を呼んで下さった恩人であるデニス・エンカーネーション教授も大変喜び、筆者が迂闊にも見落としていたハーバード・スクウェアに在る素晴らしいレストランで御馳走して下さいました。筆者の本のカバーは、木内氏の

お蔭で好感もてるデザインで、本一冊を生み出す過程における多くの人々の「見えない努力」の有り難さを改めて感じた。また、筆者の本を出版するに当たり、長い間ご無沙汰をしている人々にもご挨拶をする機会を持てた。尊敬する岡崎久彦大使とは、対外発信の重要性や世界から見ても納得のいく首尾一貫性を持つ「知的誠実さ(intellectual integrity)」の重要性についてご意見を伺うことができた。また、久しぶりに茅場町の日本経済研究センターを訪れて香西泰先生にお目にかかり、長年のご無沙汰に関してお詫び申し上げますと同時に、ハーバードにおける研究生生活についてご報告申し上げた。尊敬する方々と再びお目にかかれるきっかけができたという点でも、野村先生と木内氏に重ねて感謝したい。

4. ワシントン情報 国際関係

周知の通り、米国政治は、中東情勢や東アジアの経済安全保障問題等の外交分野で、また、財政赤字削減、年金改革、最高裁判事指名等の国内政治分野でも大きく揺れ動いている。秋以降、毎月のように一時帰国が続いて、イタリアやフランス等、他の出張のキャンセルを余儀なくされた。ワシントン DC への出張も 9 月末以降は無くなり、残念なことに、現地における直接面談の機会を逃している。また、会食と会合を楽しんだ IIE のアダム・ポーゼン氏は来年からロンドンに移り住み、12 月初旬には元 CBG フェローで松下電器産業の谷井晃裕氏も帰国する。筆者としては寂しい限りであるが、電話とメールで頻繁に連絡を取る友人や感謝祭後に中国・韓国から DC に戻ってきた IIE のエドワード・グララム氏、そして、12 月初旬に東京で再会するジョージ・ワシントン大学(GWU)のヘンリー・ナウ教授から現地情報を受け取ってきたい。

11 月 16 日における京都でのブッシュ大統領の演説を聞きながら、「この演説内容を知ったら胡锦涛(胡锦涛)国家主席はご気分を害

されて、対米対抗姿勢を一層強められるかも知れない」と、セイチ教授や様々な中国専門家(Sinologists)のコメントを思い出していた。確かに、最近「見せつける」かのように、中国は欧州及びロシアとの関係強化に熱心である。プサン(釜山/부산)で開催された APEC 首脳会議の直前、欧州歴訪中の胡主席は、11月11日、ベルリンで中独間の定期的会合を持つためのシンクタンク(中徳対話论坛/das Deutsch-Chinesische Dialogforum)を設立する旨、ホルスト・ケーラー大統領と共に発表した。これに関する中心的人物の名前を見ると、その筆頭に中国側が上海市長を経験し(1995~2001年)、現在、政治協商会議(中国人民政治協商会议(全国政协/CPPCC)の徐匡迪副主席、またドイツ側が財界の重鎮でジーメンス社のハインリッヒ・フォン・ピエラ氏と錚錚たるメンバーが並んでいる。また、それに先立つ11月3日、北京で開催された第10回中露首相定期会談(第十次定期会晤/10-й регулярной встречи глав правительств России и Китая)で、温家宝首相はロシアのミハイル・フラトコフ首相と7分野の両国協力関係を協議している。いずれにせよ、中国との付き合いを考える際、グローバリゼーションという大きな時代の流れを感じずにはいられない。こうしたなか、日本は戦略的な視点から、中国と、そして中国を巡る世界と如何に向き合っていくべきか。それを多くの尊敬すべき友人達と共に考えてゆきたい。筆者自身、ここで溢れるばかりの才能と高い「志」を備えた中国の人々と知り合う幸運に恵まれている。が、たとえケンブリッジでは外国人として多数派を占める彼等であったとしても、帰国して総人口13億の故国に戻った途端、当然のこととして彼等は極端な少数派となる。従って、「志」と才能に恵まれた彼等の「パワー」も故国では「希釈化」される。中国全体としては教育水準が未だ低く、経済的格差が拡大するなか、社会保障制度が未整備のまま次第に高齢化を迎えて、困難に直面する中国。筆者は、こうした中国と中国を巡る国際関係をここで優秀な研究者と共に考えてゆきたい。

約1ヵ月前の10月21日、翌日早朝に成田へ向けて発つ準備をしつつ、丁度200年前の1805年10月21日に行われたトラファルガー海戦を思い浮かべていた。ネルソン提督はこの戦いで仏西連合艦隊を撃破すると同時に、有名な言葉「私は責務を全うした(I have done my duty.)」を残して一生を終えた。英国詩人ロバート・サウシーの『ネルソン伝(The Life of Nelson)』は、嘗ては教養ある英国人の必読書と言われ、帝国海軍が誇る知将秋山真之も米国留学中に読んだとされている。そして、本学図書館には1813年の初版本から1990年版まで、同書が41冊も所蔵されている。本学がこれほど多く所蔵しているのは、高い「志」を希求する人々が、時代を超えて勇気ある行動の人々の話に心を打たれる証左であろう。テロ、天災、鳥インフルエンザ等を考えると、物騒なこの世の中、我が身がいつ消えるか、誰も予測し得まい。もしそうだとすると、筆者も提督のような言葉を残して人生を終えたい。しかし、残念ながら浅薄非才の筆者が残せるものは極めて限られる。それでも諦めずに、できるだけ多くの人々に喜んでもらえるものを残してみたい。幸運にもこれまで筆者は多くの方々から細やかな心遣いを頂いてきた。筆者の友人が、「愛」という漢字は、「心」を「受ける」と書くと教えてくれた。筆者が「受けとった」無数の暖かい「心」を思い浮かべ、友人の教えに「なるほど」と頷いている。来年こそは、筆者も多くの人々に「心」でお返しをしたい。自分の能力と同様に小さな貢献しかできないだろうが、来年の東アジアの平和と繁栄を願いつつ、今年最後のケンブリッジ報告を終えることにする。

以上

編集責任者	
栗原 潤	Jun KURIHARA
ハーバード大学	Senior Fellow,
ケネディ・スクール	John F. Kennedy School of Government,
シニア・フェロー	Harvard University
連絡先	
Mailing address:	79 JFK St., CBG, Cambridge, MA 02138
Office address:	124 Mt. Auburn, Cambridge, MA 02138
Tel:	+1-617-384-7430; Fax: +1-617-495-4948
Email:	Jun_Kurihara@ksg.harvard.edu; JunKuri@aol.com